



✈️ ケニアについて

ケニアは東アフリカの赤道直下に位置し、地理的・経済的に東アフリカの玄関口として、重要な役割を担っています。国

東アフリカの玄関口

ケニアの森林と植林政策

国際協力機構（JICA） 持続的森林管理・景観回復による森林セクター強化及びコミュニティの気候変動レジリエンスプロジェクト



長期派遣専門家 西川 美智子

土面積は約58万km²であり、日本の約1.5倍の面積に、約6,000万人の多様な民族・言語を持つ人々が暮らしています。首都ナイロビは標高約1,700mの高地にあり、年間を通じて比較的涼しい気候です。一方で、沿岸部の高温多湿な熱帯気候、内陸部のサバンナ気候、温暖で湿潤なビクトリア湖周辺地域など、国内には多様な気候・自然環境が広がっています。経済発展は著しく、ナイロビ中心部には



ナイロビ市内

高層ビルが建ち並び、私が普段利用しているスーパーやレストランの物価は日本とほとんど変わらない水準にあります。一方で、ナイロビの中心部から数kmの場所には、アフリカ最大級のスラムのひとつとされるキベラスラムが広がるなど、経済格差は依然として大きく、時には暴力的なデモが発生することもあります。

✈️ ケニアの森林の現状と政策

ケニアの国土の約80%は、乾燥・半乾燥地帯と呼ばれる、降水量の少ないステップや砂漠を含む地域です。植民地期の農業開発や燃料利用などにより、ケニアの森林率は大きく減少し、1963年には3%までに減少したとも言われています。

その後、政府や市民社会の取組により、森林率は現在では8%まで回復しましたが、インフラが十分に整っていない地方では、今なお生活のエネルギーを薪や木炭に依存する世帯が多く、森林の減少を招きやすい状況にあります。その結果、干ばつなどの気候変動の影響を受けやすく、地域の



半乾燥地帯(サバンナ)

脆弱性が高い状況が続いています。こうした状況を踏まえ、ケニア政府は2032年までに150億本の植林を行うという、意欲的な目標を掲げております。



関係機関との集合写真



関係機関とのワークショップ

Y JICAの森林プロジェクト

ケニアとJICAは、森林分野において40年以上にわたる協力の歴史を有しています。私は、2025年1月から、JICAが実施する「持続的森林管理・景観回復による森林セクター強化及びコミュニティの気候変動レジリエンスプロジェクト」に従事しています。本プロジェクトは、①森林

の保護・管理やアグロフォレストリーの推進に関する政策立案支援、②コマージャーフォレストリー（商業林業の推進）、③林木育種、④地域協力の4つのコンポーネントから構成されており、ケニア環境気候変動森林省（MECCF）、ケニア森林公社（KFS）、ケニア森林研究所（KEFR）と連携して実施しています。私は、政策支援の長期派遣専門家として、アグロフォレストリー戦略や、日本と



サファリで撮影したライオン

Y さざんか

ケニアの間の二国間クレジット制度[※]における森林分野のガイドラインの策定支援などの業務を行っています。また、政策立案には正確なデータが不可欠であることから、ケニアの森林の現状を把握・分析するための「国家森林モニタリングシステム」の改良等にも関わっています。更に、新たな政策が整備されても、多くの途上国と同様に、それらを実行するための十分な予算が確保されていないという課題があります。このため、ケニアにおけるグリーンファイナンス実施に向けたコンセプトノートを作成し、国際支援に関係する機関へ働きかける取組も行っております。

ケニアはサファリ王国として世界的に知られており、観光業はGDPの約7%を占めます。私もケニア各地のサファリを訪



サファリで撮影した野生動物

れ、地域ごとに特色のある野生動物を間近で観察し、楽しんでいきます。一方で、ライオンが人を襲った事例や、ゾウが近隣の畑に入り込み、野菜やトウモロコシを食べ尽くしてしまうといった話を、ガイドの方から伺うこともあります。動物の種類は異なりますが、野生動物の保護と地域住民の安全や生活環境の向上を両立させる難しさは、日本と共通していると感じています。

[※]二国間クレジット制度：途上国等への優れた脱炭素技術等の普及や対策実施を通じ、実現した温室効果ガス排出削減・吸収への我が国の貢献を定量的に評価するとともに、我が国のNDC（温室効果ガス削減目標）の達成に活用する制度。